

高原地域における「らくらくベンチ採」を用いたイチゴ高設栽培技術

熊本型イチゴ高設栽培装置を用いて、高原地域で「とよのか」を栽培する場合、採苗時期は6月15日～25日、定植時期は9月5日～10日、育苗時の最終追肥は定植前35日が適当であり、冬季の培地加温は増収効果があるが、1果平均重、果実糖度は低下するため必要性は低い。

農業研究センター 高原農業研究所 (担当者: 中河原 一布)

研究のねらい

熊本型イチゴ高設栽培装置が開発され普及段階に入っているが、高原地域においては平坦地域と比較して花芽分化時期が早く、また、冬季の気温低下が激しいため草勢維持が困難であるなど特有の条件を有するため高原地域に適した栽培技術を確立する。

研究の成果

1. 採苗時期としては6月30日では収量が低下し、6月10日前後では奇形果の増加により商品果収量が低下する場合があることから、6月15日～25日頃が適当である。(図1)
2. 定植時期は8月30日～9月1日では、花芽分化時期が早い年は多収を示すが、花芽分化が遅れる年には頂果房の出蕾時期が遅れ商品果収量が低下する傾向にあり、9月10日定植では商品果収量が低下することから、9月5日～10日頃が適当である。(図2、表1)
3. 育苗時の最終追肥時期は定植前35日に行うことで頂果房の出蕾時期が早く、商品果収量も高い。(図3、表2)
4. 冬季の草勢維持のため培地加温を行うことで、商品果収量は増加するがその効果は必ずしも大きくなく、一方で1果平均重、果実糖度は低下する傾向にあるため、培地加温の必要性は低い。(図4、5、6)

普及上の留意点

1. 高原地域における熊本型イチゴ高設栽培装置を用いた栽培に適用できる。
2. 試験期間中の年次別花芽分化状況は、平年比で H13: やや早、H14: 並～やや遅、H15: やや遅である。
3. 出蕾の不揃いは後の収量、生育への影響が大きいので、高温が予想される場合は定植を遅らせる。
4. 本試験における培地加温方法は、高設栽培装置の架台全体を厚さ0.05mmの塩ビフィルムで被覆し、内部に加温機のダクトを配置し温風吹き出しにより行っており、培地の夜間最低温度15以上を維持した。なお、被覆期間は11月中旬～3月下旬である。

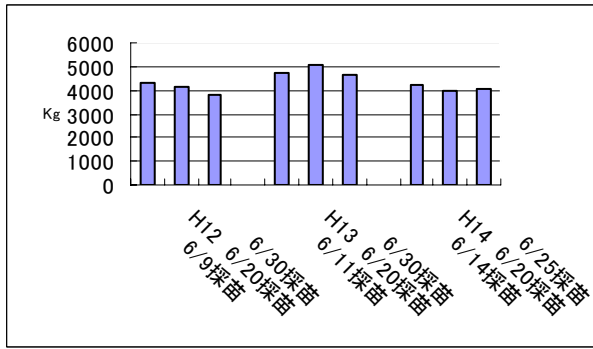


図 1 採苗時期が商品果収量に及ぼす影響

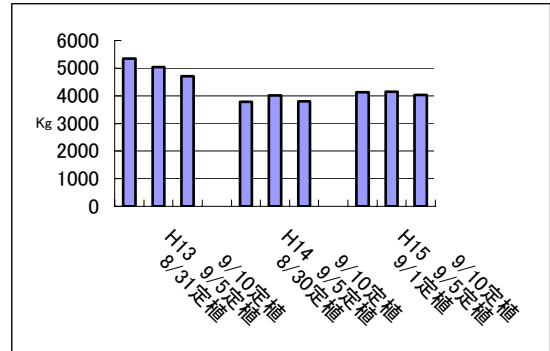


図 2 定植時期が商品果収量に及ぼす影響

表 1 定植時期が頂果房出蕾期に及ぼす影響

試験区	出蕾日		
	平均	開始	終了
8/31 定植	10/20±6.7	10/9	11/25
H13 9/5 定植	10/16±3.6	10/10	11/23
9/10 定植	10/23±7.2	10/10	12/29
8/30 定植	11/7±18.3	10/5	12/24
H14 9/5 定植	10/28±15.6	10/9	12/26
9/10 定植	10/22±4.0	10/14	12/14
9/1 定植	11/15±11.2	10/26	12/1
H15 9/5 定植	11/9±11.3	10/26	12/5
9/10 定植	10/30±3.7	10/16	11/20

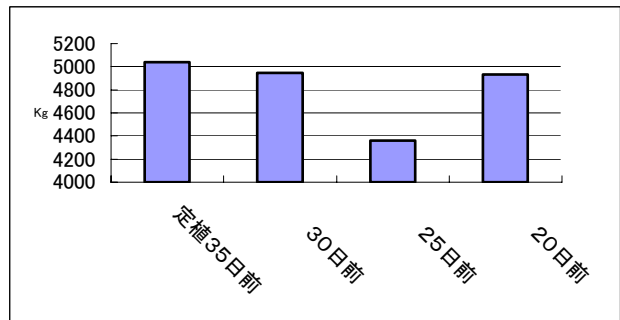


図 3 最終追肥時期が商品果収量に及ぼす影響

表 2 最終追肥時期が頂果房出蕾期に及ぼす影響

試験区	出蕾日		
	平均	開始	終了
定植 35 日前	10/16±3.6	10/10	11/23
30 日前	10/22±12.6	10/9	12/2
25 日前	10/24±15.8	10/8	12/29
20 日前	10/27±16.2	10/8	12/6

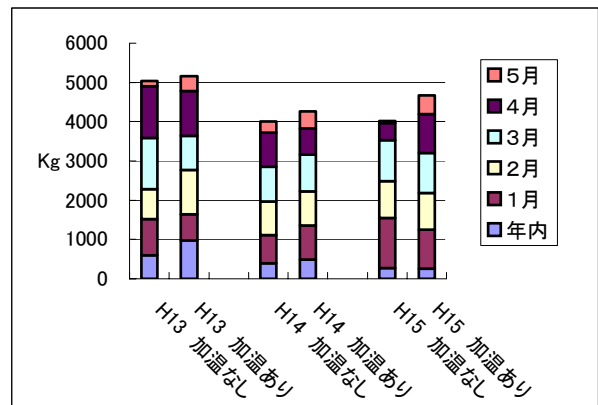


図 4 培地加温の有無が商品果収量に及ぼす影響

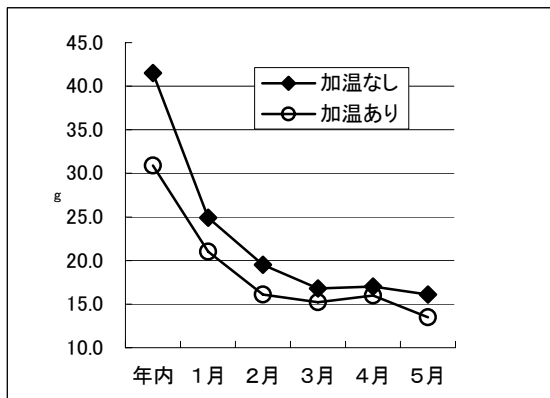


図 5 培地加温の有無が 1 果平均重に及ぼす影響

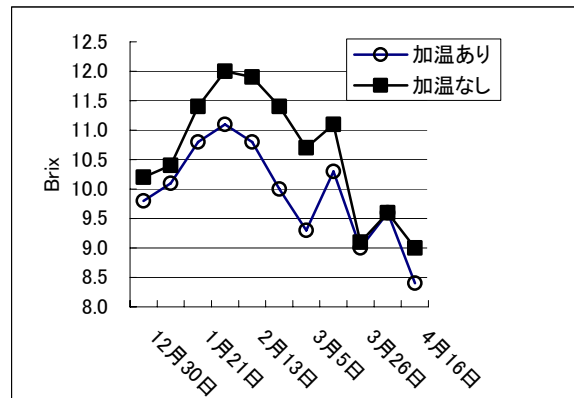


図 6 培地加温の有無が果実糖度に及ぼす影響